

SHOW HEY シネマールーム

★★★

誰のせいでもない

2015年・ドイツ、カナダ、フランス、スウェーデン、ノルウェー映画
配給/トランスフォーマー・118分

2016 (平成28) 年 11 月 23 日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督：ヴィム・ヴェンダース

出演：ジェームズ・フランコ/シャ

ルロット・ゲンズブール/レ

イチェル・マクアダムス/マ

リ=ジョゼ・クローズ/ジュ

リア・サラ・ストーン/ロバ

ート・ネイラー/ジャック・

フルトン

■■■ショートコメント■■■

◆本作冒頭に見る交通事故は、ラジオを聴きながら雪道を運転する作家のトマス（ジェームズ・フランコ）の車の前に、突然左手からソリが飛び出してきたもの。トマスは急ブレーキをかけたが間に合わず、ソリの少年は車の下敷きに……。そんな風にゾッとしながらトマスがドアを開けて外に出ると、右の車輪の横にソリが停まり、その横に1人の少年がうずくまっていたから、ホッと一安心。しかも、少年には奇跡的に何のケガもないようだから、超ラッキー。そう思って左手を見ると、斜面の上に一軒の家があったので、「あれが君の家？」と尋ねると頷いたから、トマスは少年を連れて家まで坂道を上っていくことに。

家をノックするとその少年クリストファー（ジャック・フルトン）の母親ケイト（シャルロット・ゲンズブール）がドアを開けたが、トマスが事故のことを告げ「奇跡的に……」と言いかけると、ケイトは血相をかえてもう1人の男の子の名前を呼びながら飛び出していったから、アレレ……。この交通事故によってクリストファーと一緒にソリで遊んでいた弟は命を失うことになったが、さてこの事故の責任は？

法的にトマスは無過失？交通事故の事件を4年間ずっと扱ってきた私はそう判断したが、それは損害賠償の問題だけ。さて映画の世界では？タイトルどおり、この交通事故は「誰のせいでもない」の……？

◆2015年ベルリン国際映画祭でその生涯功績を称えられ、名誉金熊賞を受賞したヴィム・ヴェンダース監督の最も有名な作品は『ベルリン・天使の詩』（87年）で、1945年生まれの大巨匠だが、私は彼の作品をそれ以外に全然観たことがない。そんなヴィム・ヴェンダース監督が本作では、トマスと①彼を取り巻く最初の恋人サラ（レイチェル・マクアダムス）、②サラと別れた後の恋人で、一人娘を連れて編集者のアン（マリ=ジョゼ・クローズ）そして③あの交通事故の被害者の母親であるケイトという3人の女性との接点の中で揺れ動きつつ、作家として成長していくトマスの12年間を描いていく。

事故当時創作に行き詰っていたトマスは、この事故を経験したことによって一回り人間的に成長したためか、モノ書きの仕事の方は以降順調に。しかし、逆に恋人との仲はサラからアンに入れ替わっていくことになったが、それは一体なぜ？本作の新聞評は概ね好意的で「興行き」の深さを褒めるものが多いが、残念ながら私にはそれがよくわからず、イマイチ……。しかし12年後、16歳に成長したクリストファーの手紙がトマスに届くと、俄然サスペンス色が強まっていくことに……。

◆あの交通事故で死亡した少年の兄だったクリストファーも、12年を経た今では16歳になっていた。トマスが編集者のアン、その娘のミナ（ジュリア・サラ・ストーン）と一緒に現在住んでいる家はすばらしい豪邸だから、彼が大成功していることは明らかだ。そんな彼の家に届いた1通の手紙はクリストファーからのもので、「1度会いたい。会っていろいろと話をしたい」と書かれていたが、そこには同時に母ケイトの惨状が書かれていたから、こりゃひょっとして金の無心……？

巨匠ヴィム・ヴェンダースが監督した本作はセリフも少なく説明も少ないから、トマスがそう考えて身構えたかどうかはわからないが、それに対して彼は「今は新作を書くのに忙しい。会うのは先にしよう」と返事したから、これは体の良い面会拒絶？16歳のクリストファーがそう解釈したかどうかはわからないが、ある日アンとミナと共に音楽会に出かけて自宅に戻ってくると、窓が開いていたばかりか何とベッドには小便がかけられていたからビックリ！こりゃ一体誰のしわざ？トマスはすぐに警察に届け出たが、「犯人が見つかる可能性は低いでしょう」との頼りない返事だったから、アンとミナは別のところに避難させトマスが1人で住んでいると……。

◆本作でトマスを演じたジェームズ・フランコは、ガス・ヴァン・サント監督の『ミルク』（08年）（『シネマルーム22』42頁参照）、ダニー・ボイル監督の『127時間』（10年）（『シネマルーム26』15頁参照）等に出演しているイケメン俳優だが、本作では常に冷静な行動とセリフに終始しているためか、私にはあまり存在感が感じられない。また、トマスの最初の恋人サラも、現在一緒に生活しているアンとその娘ミナもそれぞれ美人だが、あまり存在感がない。それに対してケイトを演じたシャルロット・ゲンズブールは、ラース・フォン・トリアー監督の『アンチクライスト』（09年）で観た素っ裸での体当たり演技が強烈だった（『シネマルーム26』83頁参照）し、『ニンフォマニアック Vol. 1/Vol. 2』（13年）の演技も印象に残っている（『シネマルーム33』91頁参照）から、存在感が強い。

クリストファーはそんなゲンズブールが演じるケイトの息子だから存在感が強いのは当然かもしれない（？）が、彼は今一体トマスに何を求めているの？それが金でないことは明らかだが、そうかといってトマスの愛でもないはずだ。思春期の少年の心情が量り難いのは当然だが、ヴィム・ヴェンダース監督は本作終盤の男と男が対峙するそんなストーリー展開の中で一体何を描きたいの？そこらあたりが十分わかりにくいこともあって、私には本作はイマイチ……。

2016 (平成28) 年11月25日記